

里山の歴史・文化的な環境を未来に伝えるために

——土浦市穴塚の里山における試み——

及川 ひろみ

(NPO 法人 穴塚の自然と歴史の会 理事長)

1. はじめに

茨城県つくば市に隣接した土浦市穴塚には、広さ約 100 ha の里山がある。この里山の中央に 3 ha ほどの「大」の字状の池があり、穴塚大池と呼ばれている。この池を取り囲んで分布するコナラ林などの二次林や、スギ林、マツ林などの植林地が 70 ha の面積を占めている。雨水に加えて林からのわき水（地下水）が池の水源となっている。面積の割に長い岸边は護岸工事がされていないため、複雑に入り組んでおり、狭いながらも湿原、谷津田（一部は休耕田）、畑、草地なども点在し、きわめて多様で優れた景観を呈している。しかも、生物多様性にも富む地であることも知られている。

穴塚大池周辺は自然環境のみならず遺跡、文化財の宝庫でもある。国指定史跡の上高津貝塚、穴塚古墳群など旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代の遺跡が点在し、国の重要文化財の梵鐘を有する般若寺もあり、近世のたたずまいを残す家並みや石造物など、豊富な歴史遺産を併せもつ貴重な地域である。

自然環境の面からも歴史的な面からも貴重なこの穴塚地域は、環境省『特定植生群落』（環境庁、1981）、茨城県『銃猟禁止区域』（茨城県、1982）、文化庁『日本の文化的景観——「農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究報告」の重要地域』（文化庁、2003）、日本昆

虫学会『昆虫類の多様性保護のための重要地域』（日本昆虫学会、2000）、茨城県『子どもいきいき自然体験フィールド 100 選』（茨城県、2003）、朝日新聞社『茨城の自然 100 選』（朝日新聞社、1989）等にも選定・指定されている。

この穴塚地域を対象に、1989 年に「穴塚の自然と歴史の会」は発足し、2003 年には NPO 法人となった。発足以来の基本的目標は、多様な生き物を育む里山生態系と

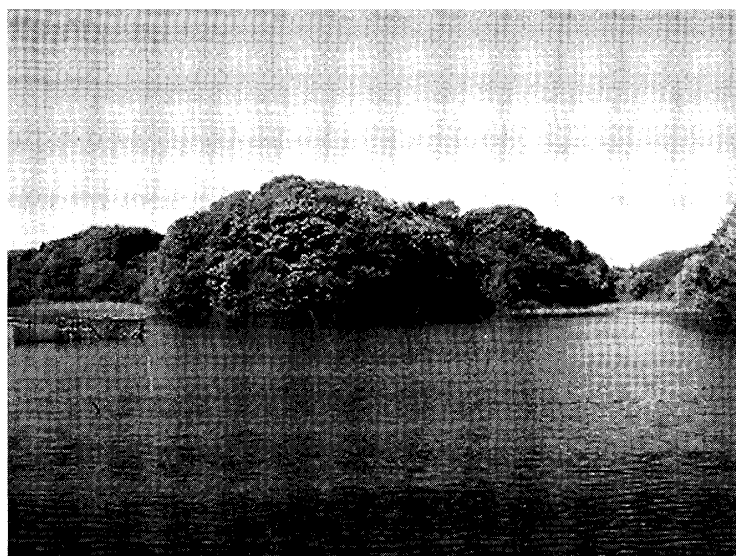


写真 1 土浦市穴塚大池

歴史や文化を保全し、さらにはこの地域の特性に即したかたちで、未来の子ども達に郷土の宝を継承することである。この目的を達成するためには多様な活動が必要である。会の主な活動項目をあげると以下のとおりである。

- ① 里山の現状と歴史的背景を調べ、得られた結果を広める活動
- ② 里山の自然について調べ、保全方法を探る活動
- ③ 里山を保全、再生する活動
- ④ 子どもたち、若者、市民へ、里山の価値を知らせる活動——環境教育活動
- ⑤ 他団体との連携

2. 里山の現状と歴史的背景を調べ、得られた結果を広める活動

背景：現在、里山と呼ばれている景観は、人々が農業を営む中で形成された歴史的所産である。そもそも里山という概念が生まれ、広まってきたのは、1960年代に始まった高度経済成長期以降、日本の社会・経済構造が大きく変化する中で、農村景観が劇的に変貌し、失われてきたことが契機であった。以前は余りにもありふれた存在だったために、とくに注目されることも少なかった農村景観に、里山という名前を与え、焦点をあて、里山の管理、利用方法、その背景となる暮らしや農業、里山の文化を記録し、保存することを緊急課題と考え、次のような活動にとりこんできた。

現状：宍塚の里山、100 haのうちおよそ75 haが私有地である。しかも40年以上も前から全域を覆うように開発計画があり、オイルショック、バブルの崩壊といった幾多の開発を断念せざるを得なかった状況が続ぎ、しかも現在も土浦市は業務地などとして整備することを総合計画でうたっており、地権者の多くが開発を望んでいると言われている。都市近郊の里山はどこも同じような問題を抱え、その多くが開発され、住宅地、商業地、また工場用地へと変貌をとげ、現在、都市近郊にあり、100 haもの面積を持つ里山は全国的に見ても稀なものとなっている。しかし、都市近郊に位置する里山は国の環境基本計画の施策にとり上げられている「自然とのふれあい」の面からも、また生物多様性保全の立場からも大きな役割を持つと考えられ、その総てを保全することを願い活動してきた（土浦市の総合計画の変遷を見ると、宍塚地域について土浦市第5次総合計画では開発予定地としていたが、第6次総合計画では開発と保全を併記し、さらに現在策定中の第7次総合計画案ではさらに踏み込んだ表現をとっている）。

活動の経緯：活動を始めるにあたって、この場所が暮らしと密接につながった歴史的な背景を捉えることの重要性から会の名称を「宍塚の自然と歴史の会」とした。また、保全を一部の人々が望んでいるのではないと言う状況を作り出すことが重要なことから、会発足当初から地域の方、宍塚を訪れる多くの方々から話を聞くことを心がけてきた。とくに地元の方々から宍塚について、大池についてどのような思いを描いておられるかを知りたいと、宍塚の里山で出会った多くの方々から話を聞くことを心掛けた。話を聞くなかで池の対岸の小山は「ぐみぬき山」、その隣が

及川：里山の歴史・文化的な環境を未来に伝えるために



写真2 『続聞き書き里山の暮らし——土浦市穴塚』

「亀の甲」また、「ゲンベー山」「五斗蒔谷津」，「稲荷谷津」などの地名，昔池で泳いだ，うなぎが採れた，林は松が多かった。松葉をさらって苗床に入れた……話は尽きることなく続き，後日自宅を訪問しさらに詳しい話を聞き，大切に保管してあった思い出の品々などを拝見するなどしながら，聞き書き活動の原型が作られていった。

また，会が発足した当初，「観察会」を計画したが，散策路は市道であっても，穴塚で行う観察会であるから区長に挨拶をすることが必要と考え，「観察会をさせてほしい，観察路の草刈をさせて欲しい」と区長に願い出た。区長は毎年交代し，しかも旧家が勤めることが多かったことから，区長が新たに決まるたびに訪問し，昔の穴塚の話を聞いた。聞いたことの多くは会報「五斗蒔だより」に掲載した。

活動の意義：活動を通して，40～50年前頃から暮らしの様子が大きく変わったとは言え，農業や日常の暮らしと自然が深く結びついて生み出されてきたこのような場所が，先祖の知恵の結晶，まさに文化財といえる場所であることが明白になった。そして，暮らしのなかで培われてきた必要な知恵や大切な文化を失っている現状であり，里山の未来を考える時，これまでの人と里山のかかわりを，その土地その土地に即して学ぶことが急がれる課題であることも明確になった。

活動方法と内容：会の活動の多くが部会組織で行われている。会設立当初から自主的に行われてきた聞き書きを中心とした地域の歴史，文化に関わる活動を1997年歴史部会として立ち上げた。その後聞き書き活動，資料収集をさらに活発化させ，地元12人の方から聞いた話，収集した資料を基に，1999年『聞き書き里山の暮らし——土浦市穴塚』（穴塚の自然と歴史の会，1999）を出版した。内容は穴塚に暮らす方の20世紀数十年間の時空両面の定点の記録，地元の方々穴塚について書かれた随筆，1960年（昭和35年）ごろの大池周辺の土地利用図，大池周辺の呼び名，太閤検地にみる昔の穴塚の地名，1875年（明治8年）開学の穴塚小学校の金庫から見つけた1905年（明治38年）から1911年（明治44年）農産物収量，耕作面積などの資料，明治以降の年表（土浦市とその周辺，穴塚のできごと）等々である。

学校教育においても地域の歴史・文化を理解することはきわめて重要な課題であることから，小学校高学年以上，中学生の利用を配慮して作成した。2000部出版した。茨城県内の県，市町村立図書館，希望する小・中・高等学校，市役所，教育委員会等へ寄贈した。2000年には茨城県中学校推薦図書に選定され，また，『聞き書き里山の暮らし——土浦市穴塚』は生態保全学会の学会誌に紹介された。

その後，歴史部会に加わり活動する人の数も増え，2005年『続聞き書き里山の暮らし

——土浦市実塚』2000部を出版した。この聞き書き本は地元44名の方からの協力を得て完成することができた。個人の記録の他に、多数の方々の情報をもとに、農業用水、山仕事、田んぼと稲作、畑と作物、食生活、住まい、衣生活、年中行事、聞き書きにでてきた動植物等テーマごとに整理しまとめた。資料は、地図（1883年〔明治16年〕迅速地図）小字名地図等、文献資料、航空写真、昔の写真の収集等の資料収集を行った。

確かな情報とするために、少なくとも一人5回以上聞き取りを行いまとめた。また、何時の話であるかを確認しながら記録した。昔の道具などは写真で、歌、唱え文句などは録音して記録した。当然、生活も精神的にもかなり厳しいものがあつたことは容易に想像できるが、お年寄りたちは皆淡々と語られ、厳しい暮らしの話は強く語られることはなく、また聞いて欲しい訳ではないことが伝わってきた。それより、もっと語りたいことがあり、それは、里山の暮らしが今思うと夢のような日々であつたこと、懐かしい思い出が詰まった暮らしを記録してくれる者のあることの喜びが感じられ、汲めども尽きぬ泉のようにあふれ出る話を書き留めた。今記録に留めておかなければ、記憶さえ失われてしまう里山の暮らしの話を記録した。例えば、「頭はシャンプー代わり粘土を使って洗ってもらった。洗い終わると、梅干をとんとんとンとこすりつけてくれるの」。これは現代の「泥パック」、梅干は「リンス」……。科学的、合理的な、無駄のない生活の話は、まさに知恵の結晶のように感じられた。またあるお年寄りを訪問して、「ぼろ帯」と呼ばれる野良着の帯（裂き織りの帯）を見せていただいたとき、その美しさに感激した。過酷な労働のなかで受け継がれてきた文化、一人ひとりがもつ豊富な技に驚かされた。今では確認することのできないゲンジボタル（キノボタルと呼ばれていた）やゲンゴロウ、タガメなどの生き物の記録もできた。キノコの話はお年より多くの方の話に出てきたが、今では茨城県全体でも見ることもできない種類も数多くでてきた。

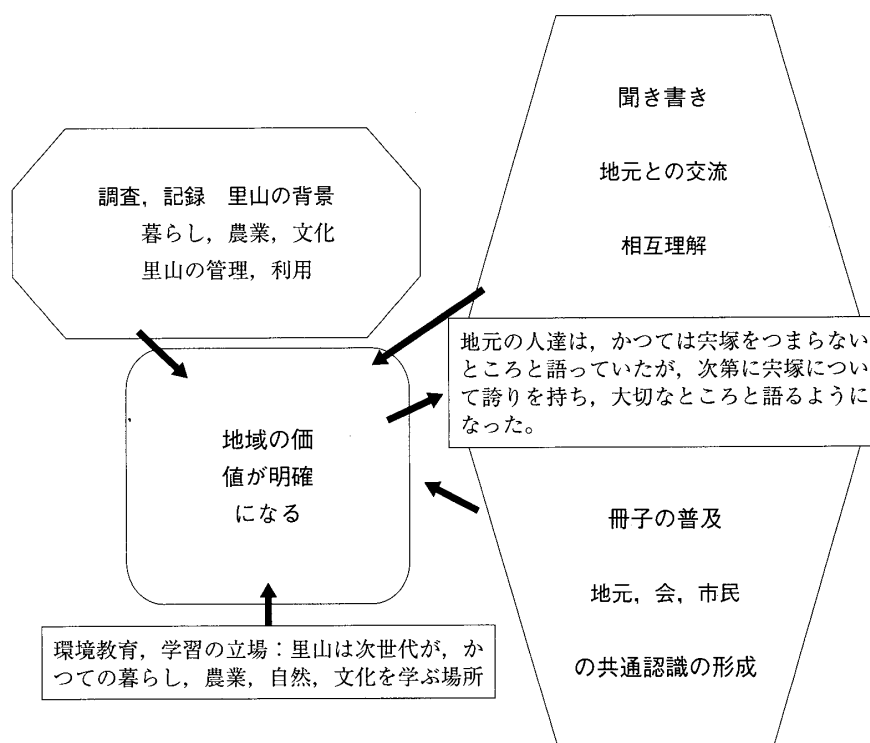
こうしたなかで、聞き手の多くが話を聞く前は蝶、トンボ、植物など里山の生き物に心を奪われることが多かったが、この聞き書き活動によって、おみなえし、山百合など里山に咲く花々が暮らしの糧であつたことを知った。そしてなにより人と人のつながりの温かさ、ぬくもりが地域社会の根底にあることを感じることもできた。これら、人と人のつながりこそが農業の根底にあり、集落を形成し、まちづくりの根幹となっていることを学び、地元を理解するこの活動を抜きに里山の保全を語ることもできないことを確信した。

この出版を機に地元との交流がさらに深まり、しだにお年寄りたちは、思い出を語るだけでなく、積極的に、技を伝えて下さるようになった。その内容は農作業のあれこれ、昔の遊び、藁ない、草履作り、注連縄作り、味噌や納豆づくり、蚕からの糸とりなど多岐にわたっている。縄繻いを教わった大学生たちは、練習して次には一緒に子どもたちに教えるようになった。また、伝統行事のうち、近年廃れていた「青屋箸」（旧暦6月にすすきの箸でうどんを食べる——麦の収穫を祝つての行事とも言われている）に会としてとりくみ好評を得ている。会主催の秋の収穫祭では毎年地元の行事食「ぬっぺ」をお年寄りの指導で作っている。

そしてこの活動を始めた頃「実塚がどこにでもあるつまらないところ」と認識していた地元の方々が、最近では、胸を張り誇りを持ってこれまでの暮らしを考えるようになり、「自慢できる実塚が宝」になってきたようだ。

及川：里山の歴史・文化的な環境を未来に伝えるために

図 「里山の暮らし」出版の結果



3. 地元住民ではないという自分（たち）の立場について考えること

地域で活動する民間団体として、利害の対立に及ぶもの、個人情報として公表は避けるべきものなどは掲載しなかった。市民活動と学術研究との違いである。一方、聞き書き活動は手間隙のかかる作業であるが、市民が集いまとめることは、地域を見つめ、地域の将来を考える上でも大きな意義を持つと考えられる。そしてまた、聞き書きを始めた当初、「穴塚の歴史は古い、300年前の新住民……」の話を地元の方から聞いた。そこで、どんなに親しくなっても所詮はよそ者であることを肝に銘じている。多くの地域で新住民と古くからその地に住んでいる人との間にはとかく一線が敷かれていると聞く。その溝を埋めることは容易いことではない。村社会の成り立ちを考えれば無理からぬことと考えている。常に無理は禁物と心得ている。市民が前面に立ち、ことに当たる必要はない。100 ha の里山保全には地元、行政、研究者、市民、学校……多様な団体・個人の知恵の結晶なくして実現は不可能である。目的を達成するために時間を掛け、しかし機を逸することなく進めたい。

文献

- 『旧中家村郷土史』.
- 『穴塚小学校所蔵沿革資料』.
- 青木光行, 『旧中家村村史』.
- 「茨城歌人」編集委員会, 『茨城歌人合同歌集第二集』.
- 『穴塚村地引張』1868.

- 『宍塚村明細帳』1869.
- 佐野春介編, 1979, 『中家ものがたり』中家ものがたり刊行会.
- 土浦市史編纂委員会, 1980, 『土浦市史 民族編』.
- 土浦市史編纂委員会, 1980, 『土浦市史 編纂資料』.
- 茨城県, 1982, 『銃猟禁止区域』.
- 環境省, 1982, 『特定植生群落』.
- 『日本の野生植物』1982, 保育社.
- 朝日新聞水戸支局編, 1989, 『茨城の自然 100 選』筑波書林.
- 土浦市教育委員会, 1989, 『土浦市町内誌』.
- 原田勝正編, 1989, 『昭和世相史——記録と年表でつづる世相と事件』小学館.
- 土浦市, 1991, 『土浦市第 5 次総合計画』.
- 土浦文化財愛護の会, 1992, 『みどりの文化財つちうら』.
- 土浦市教育委員会, 1992, 『図説 土浦の歴史』.
- 宍塚の自然と歴史の会, 1995, 『里山——里山サミット報告集』.
- 宍塚の自然と歴史の会, 1995, 『宍塚地域自然環境調査報告書』.
- 宍塚の自然と歴史の会, 1999, 『どんなところ？ 宍塚の里山』.
- 宍塚の自然と歴史の会, 1999, 『聞き書き里山の暮らし——土浦市宍塚』.
- 日本昆虫学会, 2000, 『昆虫類の多様性保護のための重要地域』.
- 土浦市, 2001, 『土浦市第 6 次総合計画』.
- 歴史学研究会編, 2001, 『日本史年表 (第 4 版)』岩波書店.
- 茨城県, 2003, 『子どもいきいき自然体験フィールド 100 選』.
- 土浦市史編纂委員会, 2003, 『図説 土浦の歴史』.
- 文化庁, 2003, 『日本の文化的景観——「農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究報告」の重要地域』.
- NPO 法人 宍塚の自然と歴史の会, 2005, 『続聞き書き里山の暮らし——土浦市宍塚』.
- 環境省, 2006, 『環境基本計画 第 3 次計画』.

付 記 『聞き書き里山の暮らし——土浦市宍塚』『続聞き書き里山の暮らし——土浦市宍塚』は NPO 法人 宍塚の自然と歴史の会歴史部会がとりまとめた。部会長の阿部きよ子氏の尽力が大であった。また、『聞き書き里山の暮らし——土浦市宍塚』は日野自動車グリーンファンド、『続聞き書き里山の暮らし——土浦市宍塚』は財団法人日本自然保護協会プロ・ナトゥーラファンド助成、セブンイレブンみどりの基金の助成金により出版した。

(おいかわ・ひろみ)